

<読書の秋です>

「この秋、古典を一冊読み切ろう」

開倫塾

塾長 林明夫

**Q：古典とは何ですか。**

A：日本や世界の人々が、長い年月をかけて読み継いできた作品・著作です。

例えば、日本でしたら、紫式部の「源氏物語」は古典です。

中国でしたら、孔子の教えを弟子たちがまとめたといわれる「論語」は古典です。

「源氏物語」や「論語」は、日本や中国の人々だけではなく、世界の人々によっても読み継がれていますので、「世界の古典」でもあります。

**Q：「読書の秋です。この秋、古典を一冊読み切ろう」といわれても、そのようなことができるのでしょうか。どのようにして読み切ったらよいのですか。論語を例に、お話してください。**

A：わかりました。

(1) 各々の古典には、多くの種類の本が出ています。そこで、まず大切なのは、基本となるテキスト、つまり、何で、その古典を読むのかを決めることです。

(2) 例えば、この秋「論語」を読み切るのでしたら、宮崎市定著「現代語訳 論語」岩波現代文庫 岩波書店 2000年5月16日刊が、テキストにするにはよいと思います。

(3) 吉田賢抗著「論語」新釈漢文大系1、明治書院1960年5月25日刊も、論語の素晴らしいテキストです。極めて詳細ですので、この一冊で論語の内容がよくわかります。ただし、かなり分厚いので、1～2か月で全部読むのにはかなり工夫がいります。

**Q：テキストを決めたらどうするのですか。**

A：(1) 論語は、漢文で書かれていますので、漢文がスラスラ読める人は、漢文をそのまま一気に読む。論語は、孔子の教えを、弟子たちが499章にまとめたものです。章といっても、一つ一つの章はほとんどが短い文章なので、漢文が読める人なら、すぐに読み切ることができます。

(2) 漢文をそのまま読んだのでは、よくわからない場合には、各々の章ごとに現代語訳を読む。

(3) 「子曰く」の後の、孔子の教えの内容の部分に鉛筆で「カギ・カッコ」をつける。「カギ・カッコ」の中で、大切と思われる語句や教えに、鉛筆で横線を引く、丸や四角で囲む。

(4) 「書き下し文」の、該当する語句や教えに、鉛筆で、横線を引く、丸や四角で囲む。

(5) 「漢文」の、該当する語句や内容に、鉛筆で横線を引く、丸や四角で囲む。

(6) 最後に、もう一度、その章の「現代語訳」、「書き下し文」、「漢文」の順序で、鉛筆で印をつけたところを中心に読んでみる。できれば、「音読」、声を出して読んでみる。

(7) このように、コツコツと1章ずつ読めば、1～2か月で論語を読み切ることができます。

宮崎先生の岩波現代文庫の論語でも、吉田先生の新釈漢文大系の論語でも、1～2か月で読み切ることができます。是非、お試しください。

**Q：紫式部の「源氏物語」は、どのように読み切ったらよいのですか。**

A：(1) 現代語訳のみの「源氏物語」がたくさん出ていますので、現代語だけで「源氏物語」を読み通したい場合には、図書館や書店で、どの「源氏物語」がよいか読み比べてください。自分で購入した本の場合は、気に入ったところには「カギ・カッコ」や横線などで印をつけ、行きつ戻りつしながら、読み進めることをおすすめします。

(2) 古文の好きな方は、柳井滋他校注「源氏物語(1) 桐壺一末摘花」岩波文庫、岩波書店 2017年7月14日刊をテキストになさり、次のようにお読みになることをおすすめします。

(3) この岩波文庫版の「源氏物語」は、読者の役に立つことを願い、痒い所に手が届くとはこのことかと感激するほど、微に入り細にわたりよく工夫された、「源氏物語」の第一級のテキストです。

(4) テキストを見開くと、偶数の右ページが原文(古文)、奇数の左ページが「注釈」となっています。

(5) まずは、右ページの原文に当たる「古文」を、意味のまとまりごとに、声を出して読む。注釈の番号があるところまで、ゆっくり読み進める。

(6) 次に、「注釈」をゆっくりと読む。「注釈」の内容がよく理解できたら、もとの原文に当たる古文を、もう一度、声を出して音読する。更に、もう一度、「注釈」に目を通す。

(7) 一つの段落を、このように、「原文」「注釈」、「原文」「注釈」と行きつ戻りつしながら、「注釈」が出てくるところまでを単位にして読み進める。

(8) このようにして1段落を読み切ったら、もう一度、その段落を音読、声を出して読んでみることをおすすめします。

(9) この岩波文庫版の「源氏物語」ほど、「古文を愛する読者の立場」に立って作られた、読みやすい「源氏物語」はありません。2～3か月かけ、注釈を含めじっくりお読みください。

(10) どうしても「古文」から入るのは難しいという場合には、「注釈」をよく読んでから、本文の「古文」を読むという手もあります。ぜひ、お試しを。

**Q：なるほど、「注釈」を大切にということですね。では、近代文学の古典ともいわれる夏目漱石の作品は、どのように読んだらよいのですか。**

A：(1) 夏目漱石の作品も、注釈なしで、原文を読み通すことは極めて困難と思われま

(2) ただし、いくら困難とはいえ、現代語訳で夏目漱石の作品を読むのは余りにももったいないです。ただし、1ページの中に数多くの難解な語句が頻出しますので、注釈のついたテキストをおすすめします。

(3) 夏目漱石の作品も、たくさんのテキストが出版されています。書店や図書館で、実際の作品を手に取り、注釈がわかりやすい、一番読みやすいものをお選びになることをおすすめします。図書館にある岩波書店版の「漱石全集」がおすすめです。2016年から刊行されている岩波書店版「定本 漱石全集」は、超おすすめです。

Q : 「古典は、図書館の全集で」ですか。

A : (1) そのとおりです。

(2) 学校図書館、公立図書館には、優れた全集が、文字通り、山ほど所蔵されています。以前は、知識欲旺盛な若者や社会人が山ほどいたので、図書館の全集はいつも貸し出し中で、なかなか読むことが難しかったようです。しかし、最近は、「古典離れ」が進んでいるためか、図書館の全集はいくらでも読めるようです。

(3) 今こそチャンスですので、これぞという作家や著者がいたら、1～2か月かけてじっくり、一つ一つの作品を、注釈も含めて、読み切ってくださいね。

(4) 文学作品などの人文科学だけではなく、自然科学や社会科学の分野にも、日本や世界各国、人類の宝物ともいえる「古典」が綺羅星のように、数えきれないほどあります。

(5) たくさんある中の「古典」の一つの作品との「時と空間、時空を超えた対話」に、この秋、挑戦しましょう。

それでは、また。

2017年11月5日（日）23時17分